

農村における民間藝能についての 意欲的な成果

三須 祐介

もう一五年も前のことになるが、上海

での留学を終えて日本に帰国した頃、

磯部祐子氏の「生き続ける宝巻(上・下)」

〔東方〕一八八・一八九号、一九九六年〕を

読んでほっとさせられたのを今でもよく

覚えている。留学中はちょうど民国期上

海の遊楽場に興味を持ち、『大世界』日

報をめくって「文明宣巻」などの文字を

見つけては、今はもう味わえるはずもな

い往事の舞台に思いを馳せていたのだっ

た。

宣巻とは日本の説教節のようなもの

で、仏教説話を説いた宝巻を宣巻ること

から「宣巻」と名付けられた。嘉慶年間

以降、より通俗的な物語を取り込み民国

期まで至る。新中国建国以降はその宗教

性や封建性から姿を消したと見なされて

いたが、実はひっそりとその命脈を保っ

ていたというのである。

*

本書は、太湖流域を中心とした江南地

域の歴史学的な研究の成果として既に世

に問われている『太湖流域社会の歴史学

的研究——地方文献と現地調査からのア

プローチ』（汲古書院、二〇〇七年）、『中

国農村の信仰と生活——太湖流域社会史

口述記録集』（同、二〇〇八年）に続くも

のであり、蘇州のすぐ南に位置する呉江

を中心とした地域の宣巻に関する口述記

録と、藝人から提供された宝巻をまとめ

た資料価値の高い研究書である。本書を

通読してまず驚いたのは、呉江地域にお

ける宣巻上演の多さとそれを取り巻く宗

教的民俗生活の豊穡さである。もはや

「ひっそりと生き続ける」という言葉は

妥当ではなさそうだ。構成は次の通りで

佐藤仁史・太田出・藤野真子・緒方賢一・
朱火生編著

中国農村の民間藝能

太湖流域社会史口述記録集2



A5判 256頁
汲古書院 [4725円]

ある。まず、宝巻の歴史や現況などをコ
ンパクトにまとめた序文（佐藤）、第Ⅰ部
の解題論文篇は、演劇的、テキスト分析
的あるいは社会民俗的な角度から様々に
論じた論文が並び、後の口述記録や宝巻
テキストを読むための有効なガイドとし
て機能している。第Ⅱ部は十名の宣巻藝
人に対するインタビュー記録であり、第
Ⅲ部では藝人の一人で今は失明したため
舞台をおりた朱火生氏が自ら書き記した
九部の宝巻がまとめられ、さらに附録と
して「猛将宝巻」（黄佩村誦、民国三十六
年、首都図書館蔵）、「猛将伝」（北京図書館蔵）
の旧抄本も収録されている。

ここでは主に第Ⅰ部について具体的な

内容を概観し、第Ⅱ部にも少し触れてみたい。

藤野真子「中国江南における宣卷の上演状況」は、宣卷の宗教的部分（接仏・送仏）ではなく、むしろより娯楽化された説唱部分に焦点を絞り、演劇的なアプローチで分析しようとしたものである。主に藝人へのインタビュー記録の分析を通じて浮かびあがるのは、宣卷の柔軟な上演形態である。観客（クライアント）の需要に応じて、様々な地方劇や評弾などの曲調をふんだんに採り入れ、演目の内容も土台となるストーリーリーに臨機応変に肉付けされる。まさに生きた藝能として宣卷は存在しているのだ。この柔軟さは、滬劇など新興の地方劇にかつてよくみられた幕表形式（固定した脚本はなく、場面や人物設定、核となるストーリーがあるのみで、後は役者の技量に任せられる）の上演を想起させもする。このような臨機応変さが「噓頭」というアドリブ的な演技術を取り込むことになったと思われるが、このことは藝人がインタビュのなかで「滑稽

（戯）」を意識していることにも反映されている。また越劇出身の藝人の存在は、より強い娯楽性を求める現状を象徴しており、そのことが結果的に宗教的色彩を相対的に弱めているようでもある。しかし一方で宣卷が求められる場面は願掛けや願解きと関係していることが圧倒的に多いことからわかるように、その宗教性はむしろ看過することはできない。当地の人々の宗教的民俗生活という基盤の上で競争原理が働き、クライアントの需要をより意識することによって娯楽性が磨かれていったということだろう。

緒方賢一「呉江宣卷のテクストについて——朱火生氏の宝巻を中心に」は、本書第Ⅲ部を構成する朱火生氏の宝巻テクストを材料にその分析を試みたものである。緒方氏自ら書いているように、ふつうは文字として書き起こされることのない呉江宝巻だけに、この論文は朱火生氏によつて文字テクスト化されたという経緯があつて実現したといえよう。一九五五年、四十五歳で宣卷を学び始めたいわば遅咲きの朱氏にとつて、宝巻を

■漢詩かるた交流会

「漢詩かるた」で楽しむ李白や杜甫の詩の世界
「漢詩かるた」を使って行うゲーム大会、漢詩朗誦、そして楽しい交流の時間。▼2月19日(日)14～16時半▼渋谷区リフレッシュ水川2F(東京都渋谷区東1・26・23/渋谷駅より徒歩10分/☎03・5466・7700)
▼参加費…一般・大学生一、二〇〇円/会員一、〇〇〇円/中高生五〇〇円/小学生以下無料▼参加締切り一月三二日

■2011年度宋侃さんの中国語土曜特別講座
「災害に関する中国語シリーズⅢ」

【第1回】1月21日(出)13～15時*終了【第2回】2月11日(出)13～15時【第3回】3月4日(出)10～16時半▼日中友好会館7階会議室(千代田区神田錦町1・4)▼定員20名/1回
▼講師…宋侃(東京都日中友好協会中国語講師)▼二、〇〇〇円/1回

▼主催…NPO法人東京都日中友好協会
お問合せ・お申込先…NPO法人東京都日中友好協会(東京都千代田区神田錦町1・4日中友好会館5階/☎0332958241/FAX03・32958245/E-mail: to-nichu@jcla-tyonet) * <http://www.jcla-tyonet/home>より申込書をダウンロード。

ノートにとることはある意味必要に迫られてのことだったと緒方氏は述べている。またテーマやストーリーのなかに呉江（朱氏）宣巻の特徴を見出すのは困難であり、その上演の仕方にくそ特異性があるとし、同里宣巻との比較や、朱氏宝巻に残る不断の改編の痕跡から、丁寧で生き生きとしたストーリーを創作する描写力が読み取れると指摘する。呉江の宣巻藝人はそれぞれに演技力や歌唱力、語りのうまさなどの特徴があつて人気を競っている。土台となる宝巻の物語をどのように肉付けするかは藝人によつても、また同じ藝人でも観衆に合わせて柔軟に上演するという事実を鑑みれば、この複雑に作り込まれた朱氏宝巻と現実の上演との差異をどのように考えるのか、またこの公刊された朱氏宝巻が今後の宣巻上演に如何なる影響を与えるかという問題は残されているだろう。

佐藤仁史「江南農村における宣巻と民俗・生活——藝人とクライアントとの関係に着目して」は、呉江において宣巻が営まれる環境がどのように形成されてい

るか、という問題を藝人の口述記録や上演記録をもとに分析したものである。上演記録とは藝人が宣巻の依頼者、演目、報酬額などを記したものであり、そこから佐藤氏は上演場面を類型化し、その割合を析出しているが、そこに浮かび上がるのは呉江における宣巻がいかに宗教的民俗生活と深く結びついているかということであつた。大学合格祝いでも上演されるなど、上演場面における時代性の反映も指摘している。なかでも多いのは願掛け・願解きに伴う宣巻であり、そのような場に欠かせない「仏娘」（宗教職能者）や、あるいは民間信仰を支える「老板」（個人事業主）についても藝人へのインタビューを通じてある程度明らかにしている。また村落などにおける共同祭祀の場として廟、廟会と宣巻上演の関係についての分析も興味深いものである。今後「仏娘」や「老板」などについての調査がさらに進めば、宣巻をとりまく人的ネットワークがより明確に浮かび上がるだろう。

太田出「太湖流域漁民と劉猛將信仰

——宣巻・賛神歌を事例として」は、太湖流域漁民の最も熱心な信仰を集める劉猛將と漁民との関係、またその両者をつなぐ民間藝能としての宣巻、賛神歌について検討を加えている。太田氏はまず民国期「蘇州明報」に蓮泗蕩劉王廟に関する記事を新たに発見するなど文献資料を丹念に掘り起こし、太湖漁民と劉猛將信仰の関わりについて明らかにした。さらにこの信仰と関わりの深い「劉王宣巻」に触れた上で、現在漁民の伝統文化と見なされている賛神歌についてそのヒアリング調査をもとに詳細に述べている。ここでは賛神歌歌手六組の紹介がなされているが、本書には残念なこととその詳細な口述記録は掲載されていない。賛神歌も宣巻と同じく信仰生活と密接な関わりのある民間藝能であり、今後の更なる調査研究が期待される。

第Ⅱ部は口述記録篇であり、十名の宣巻藝人へのインタビュー集となつていく。全体的な枠組みについて特徴をいくつか記しておきたい。①藝人の年齢は一九四〇年生まれから七九年生まれと幅が

あるため、世代の異なる藝人間の差異を時代背景の変化と共に読み比べる面白さがある。②インタビュは二〇〇四―一〇年にかけて断続的に実施され、一部ではあるが同一の藝人に五年ほどの時間差でインタビュが行われているため、微細ではあるがその変化をうかがい知ることができる。③男性六名、女性六名と性別のバランスも考慮されている。④インタビュアーと藝人の間には呉江方言を解する通訳者が間に入り、その記録は一字も漏らさず「普通話」に翻訳されている。⑤政治的に敏感な話題やプライバシーに関わる内容については、本人の削除要請があった場合はもちろん、要請がなくても現地の有識者の判断で削除されている場合がある。

インタビュの内容は、家庭環境や経歴に始まり、宣卷の上演状況、宣卷を取り巻く環境、地方劇や信仰との関係など多岐に亘り非常に読み応えがある。実際に語られた呉江方言から普通話に翻訳されているとはいえ（この困難な作業には敬意を表したい）、その語り口から藝人の

人となりまで感じられるほどである。ただし生の録音記録をなるべく忠実に文字に起こしているためか、繰り返しやズレも少なくない。藝人本人の記憶なども曖昧で不確かな部分が多いだろう。藝人間でその認識に齟齬がある場合もある。しかし見方を変えれば、あえて未整理の状態で公刊することによってその資料的価値が高まり、呉江宣卷の研究の地平が大きく広がったともいえるだろう。

*

本書のような民間藝能のフィールドワークの成果としては例えば傳謹『草根的力量——台州戲班的田野調查與研究』（二〇〇一年）や朱恒夫『灘簧考論』（二〇〇八年）などが挙げられ、中国の学術界においても民間藝能に対する視線やその研究方法に変化の兆しを見出すことができる。また本書でも触れられているが政府による「無形文化遺産」としての振興も既に始まっている。このような政治的振興が、現にいま生きている民間藝能の今後にとってどのような変数となりうるのかに無自覚であってはならないのは当

然だが、同様に研究も変数として既に組み込まれていることにも配慮する必要がある。本書は、単に藝能としての「宣卷」を取り出すのではなく「宣卷」の「現在」をありのままに記述している点で優れている。しかし日本の民俗藝能が近代以降の行政や研究によって少なからぬ影響を受けてきたように、本書も既に宣卷の「現在」のなかにある（外国人研究者の採訪対象となったことで藝人にある種の箔がつく、民俗的空間を超えたところであり「見られる」ことを意識していくなど、宣卷の「現在」の変数になりうるという点）。しかしそれにつけても詠嘆させられるのは、中国の民間藝能の強靱な生命力だ。それは「無所不在」の存在として「いま」を生きている。

（みす・ゆうすけ 広島経済大学）

